Japanese association of educational psychology

教師における道徳と慣習の概念

首藤敏元
（埼玉大学　教育学部）

1．目　的

社会的概念は道徳、慣習、および個人の３領域に分類できる。道徳の概念は正義概念を、慣習概念は社会システムの概念を、また個人の概念は自己と他者の概念をそれぞれ基盤として発達する。各領域概念は個人と環境との相互作用を通して、個人自らが築いていくと仮定されている。つまり、相互作用の内容が概念の形成を規定しているのである。

Turielは道徳領域と慣習領域を区別する基準の１つとして規則随伴性をあげている。即ち、道徳領域からの逸脱行為は、それを規定する規則の有無にかかわらず常に悪いと判断できる（殺人や盗みなど）。一方、慣習領域からの逸脱行為はそれを悪いと規定する規則や期待が存在している状況においてのみ、悪いと判断できる（礼儀作法や校則など）。このような規則随伴性に従った判断には、児童から大人まで発達差のほとんどないことを示すデータが提出されている。しかし、わが国の研究結果は、道徳と慣習の概念上の区別は児童から大学生にかけて発達的に達成されるものであることを示している。

子どもが規則随伴性の基準から領域判断できるということは、早い年齢段階から、子どもと子どもをとりまく他者との相互作用がその基準に沿って行われているからである。社会的概念の発達において、子どもをとりまく他者の中でも親と教師の役割は重大であろう。親や教師の社会的概念が、子どもとの相互作用に影響することが考えられる。本研究は、学校の教師が、規則随伴性の基準から、社会的概念の各領域をどのように区別しているかについて検討することを目的とした。その際、教師の経験年数が考慮にいれられた。

2．方　法

2．1　被験者

Ｊ大学大学院に通う現職教員合計70名（女性38名、男性32名）が調査に協力した。平均年齢は37歳、平均教職歴は10年であった。勤務校は小学校、中学校、および高等学校のいずれかであった。

2．2　材料

各領域を代表する行為が逸脱行為として物語化された。従来は道徳領域の行為として反社会的行動が取り上げられることが多かったが、向社会的行動も理論的には道徳領域の行動であるため、道徳領域の下位領域として取り上げられた。したがって、道徳領域から反社会的行動と向社会的行動が３つずつ、慣習領域と個人領域から３つずつ、合計12個の行動が物語化された。

規則随伴性からの逸脱行為をえがくため、「転入生」が物語の主人公になった。つまり、各行為の逸脱を規定する規則のある学校へ、規則について知らない子どもが転入し規則違反をする、という設定にされた。個人領域の行為であっても、それを規定する校則が設定された。

被験者の領域概念を検討するために、善悪判断と領域分類の質問が用意された。善悪判断の場合、「悪くない」「少し悪い」「とても悪い」の３段階の選択肢が用意された。領域分類では、違反行為に対して仮想的な３人の子どもの意見が提示され、それぞれ個人領域、慣習領域、道徳領域から行為を評価した内容であった。具体的には、「赤い靴下」を例にすると以下のようになる。個人領域の意見「約束を知らなかったのだから、しかたがないと思います。約束がなければ、赤い靴下をはいてきてもよいと思います。」、慣習領域の意見「赤い靴下をはかないのはあたりまえ。約束がなくても、赤い靴下をはかない方がよいと思います。でも、始めてきた学校で何も知らなかったのだから、しかたがないかな。」、道徳領域の意見「赤い靴下をはくことは、約束があってもなくても悪いことだと思います。始めてくる学校でも、赤い靴下は絶対にいけないと思います。」。被験者は自分の考えに一番近い意見を選択した。また、被験者の領域概念を詳細に調べるため、各領域の物語から１つずつ、善悪判断に対する被験者自身の考え（理由）を自由記述する項目が設けられた。

なお、本学会では報告されないが、45個の行為の善悪を、７つの基準から判断する質問も設けられていた。

2．3　手続き

調査は講義の時間を利用して実施された。教示、物語、および物語ごとの善悪判断と領域分類がセットにされた調査用紙が作成されていた。全般的な教示を受けた後、被験者のペースで回答することが許された。調査に要した時間は約70分であった。

NII-Electronic Library Service

Japanese association of educational psychology

3．結果と考察

3．1 善悪判断

3．1．1 領域ごとの平均値に関する分析

「悪くない」は１点、「少し悪い」は２点、「とても悪い」は３点と得点化され、４つの領域ごとに３つの物語の平均値が計算された（Table 1）。その平均値に関して、２（教職歴）×４（領域）のＡＮＯＶＡが行われた。その結果、領域の主効果が有意になった（F=488.97,df=3/204,p<.01）。Tukey法による多重比較の結果、反社会＞向社会＞慣習＞個人の順に、全ての平均値間で１％水準の有意差が認められた。また、教職歴×領域の交互作用が有意になる傾向がみられた（F=2.50,df=3/204,p<.1）。単純効果の検定の結果、教職歴の差は慣習の領域においてのみ有意に達した（F=9.62,df=1/272,p<.01）。

Table 1 領域ごとの善悪判断の平均値（ＳＤ）

	10年未満 (n=32)	10年以上 (n=38)
道徳：反社会	2.96 (0.14)	2.92 (1.34)
道徳：向社会	2.35 (0.44)	2.31 (0.42)
慣習	1.71 (0.47)	1.45 (0.33)
個人	1.12 (0.26)	1.11 (0.23)

† 得点は 1:「悪くない」、2:「少し悪い」、3:「とても悪い」の3段階であり、4つの物語の平均値から計算されている。

3．1．2 物語ごとの度数に関する分析

教職歴と物語ごとに、善悪判断の各選択肢への選択数が算出された（配布資料－１）。個人領域と反社会領域では、理論的仮定と一致した判断が得られた。つまり、教職歴にかかわらず、ほとんどの被験者が個人領域の規則違反を「悪くない」、反社会領域の違反行為を「とても悪い」と判断していた。一方、向社会領域と慣習領域では判断が分散する傾向がみられた。さらに、慣習領域の「食事中のおしゃべり」と「挙手をして発言」においては、教職歴の短い被験者では違反行為を「少し悪い」と判断する割合が高いが、教職歴の長い被験者では「悪くない」と判断する割合が高くなっていた。

3．2 領域分類

3．2．1 理論的領域と一致した分類の平均数に関する分析

各領域内の物語において、所与の領域と被験者の選択した意見の領域とが一致した物語の数が算出され（Table ２）、その得点に関して２×４のＡＮＯＶＡが実施された。その結果、領域の主効果のみ有意になった（F=117.25,df=3/204,p<.01）。平均値は、反社会≒個人＞向社会＞慣習、となり１％水準で有意差が認められた。反社会領域と個人領域の行為はほとんど全ての物語において理論的領域と一致した分類がなされたのに対し、向社会領域の行為では平均して約２つ、慣習領域の行為では平均して約１つであった。

Table 2 理論的領域と一致した分類の数

	10年未満 (n=32)	10年以上 (n=38)
道徳：反社会	3.00 (0.00)	2.90 (0.50)
道徳：向社会	1.91 (0.91)	1.74 (1.02)
慣習	1.12 (0.77)	1.08 (0.74)
個人	2.81 (0.53)	2.92 (0.27)

† 得点は、領域ごとの3つの物語のうち、理論的に仮定される領域と一致して分類された物語の平均数にもとづいている。

3．2．2 物語ごとの領域分類に関する分析

慣習領域と向社会領域の行為はどのような領域分類がなされたのであろうか。物語ごとに、各領域への分類数が計算された（配布資料－２）。個人領域と反社会領域の行為では、被験者の９割以上が領域と一致した意見を選択していた。一方、慣習領域の行為のうち、「朝の挨拶」では慣習領域と道徳領域の意見が、「食事中のおしゃべり」と「挙手をして発言」では個人領域と慣習領域の意見が選択される傾向が強かった。向社会領域では、３つの物語とも慣習領域と道徳領域の２つの領域の意見が選択される傾向が強かった。

教職歴による領域分類の違いについて、物語ごとにχ^2検定が行われた。反社会領域、向社会領域と個人領域においては、教職歴の差はほとんど見られなかったが、慣習領域の行為において、両者の差が大きくなる傾向がみられた。「朝の挨拶」では、教職歴の短い被験者の約５割が慣習領域の意見を選択し、約４割の被験者が道徳領域の意見を選択したのに対し、教職歴の長い被験者の約７割が慣習領域の意見を選択していた（P<.05）。「食事中のおしゃべり」と「挙手をして発言」では、教職歴の短い被験者よりも長い被験者の方が個人領域の意見を選択する割合が高くなる傾向がみられた。

NII-Electronic Library Service